

黙示録5章1-6節 「贖われるまでのうめき」

1A 世界の相続

1B 購入証明書

1C 買い戻しの権利

2C 近親者

2B 悪魔に売り渡された世界

1C むせび泣くヨハネ

2C 義に飢え渴く者

2A 贖いの代価

1B 立っている、屠られた子羊

1C 罪の代償

2C よみがえり

2B 畑の中の宝

1C 愛された妻

2C 畑全体の購入

3A 万物の賛美

1B 御霊の初穂

2B 希望と忍耐

本文

黙示録 5 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、黙示録 4 章まで来ました。午後に、5 章を一節ずつ学びます。今朝は、1-6 節まで読んで、そこから、聖書全体にある、神の贖いの計画を見ていきたいと思えます。そして、私たちキリスト者、教会がその計画の中で、どういうところに置かれているかを知ります。「¹ また私は、御座に着いておられる方の右の手に巻物を見た。それは内側にも外側にも字が書かれていて、七つの封印で封じられていた。² また私は、一人の強い御使いが「巻物を開き、封印を解くのにふさわしい者はだれか」と大声で告げているのを見た。³ しかし、天でも地でも地の下でも、だれ一人その巻物を開くことのできる者、見ることのできる者はいなかった。⁴ 私は激しく泣いた。その巻物を開くにも、見るにも、ふさわしい者がだれも見つからなかったからである。⁵ すると、長老の一人が私に言った。「泣いてはいけません。ご覧なさい。ユダ族から出た獅子、ダビデの根が勝利したので、彼がその巻物を開き、七つの封印を解くことができます。」「⁶ また私は、御座と四つの生き物の真ん中、長老たちの真ん中に、屠られた姿で子羊が立っているのを見た。それは七つの角と七つの目を持っていた。その目は、全地に遣わされた神の七つの御霊であった。」今朝は、ヨハネが、激しく泣いているというところに特に注目します。

1A 世界の相続

前回、私たちは、永遠の御座が天にあることを見ました。主なる神が、すべてを支配しておられます。ところが、世界がそのように、神の支配の下に入っていないという現状があります。ヘブル人への手紙の著者が、このことを語っています。先ほど交読文で読んだ詩篇を引用して、次のように話しています。「2:6-8 ある箇所で、ある人がこう証しています。「人とは何ものなのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とはいったい何ものなのでしょう。あなたがこれを顧みてくださるとは。あなたは、人を御使いよりもわずかの間低いものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせ、万物を彼の足の下に置かれました。」神は、万物を人の下に置かれたとき、彼に従わないものを何も残されませんでした。それなのに、今なお私たちは、すべてのものが人の下に置かれているのを見てはいません。」

私たちの教会では、しばしば、有志たちで尾瀬旅行に行きます。尾瀬ヶ原の自然には、いつも圧倒されます。神の芸術です。神はすばらしい芸術者であることを、いつも思われます。詩篇にある、自然のすべてが神をほめたたえているというのは、その通りです。けれども、スマホを手にしてニュースを見れば、幻滅する話しが流れてきます。この落差ですね。主は生きておられ、支配しておられます。けれども、人の罪のゆえに、悪魔が支配している世界も展開しているのです。この葛藤の中に、私たちはいつも置かれています。

1B 購入証明書

今読んだ、神の御座の幻は、まさに、その原因となっていることを示しています。御座におられる方が、右手に巻物を持っています。けれども、それは七つの封印で封じられていました。これは、ユダヤ人が見れば、「あっ、土地の購入証書だ」と分かるでしょう。

預言者エレミヤが、土地購入証書に自分が署名した場面が、エレミヤ書 32 章に出てきます。彼のおじが、「畑を買ってくれ、あなたには買い戻す権利があるのだから」と言われます。それで、彼は銀十七シケルを払って、その土地を買い取りました。証人を立てて、その証書に署名します。それを土の器に入れます。そして、こう宣言します。「32:14-15 イスラエルの神、万軍の【主】はこう言われる。これらの証書、すなわち封印されたこの購入証書と、封印のない証書を取って土の器の中に入れ、これを長い間、保存せよ。15 なぜなら——イスラエルの神、万軍の【主】はこう言われる——再びこの地で、家や、畑や、ぶどう畑が買われるようになるからだ。」エレミヤは、バビロンが来て、すべての土地が取られることを知っていました。なのに、土地を購入したのです。けれども、七十年後に帰還して、ここに住むようになるのだと信じて、それを宣言したのです。

1C 買い戻しの権利

イスラエルには、買い戻しの権利という律法が、主から与えられています。それは、主がアブラハムに、ここをあなたに与えると言われて、それがイスラエルの十二部族に割り当てられました。

その約束の地を、貧しいからという理由で売り渡してはいけないという、強い意志を、神は持っておられます。「レビ 25:23-25 土地は、買い戻しの権利を放棄して売ってはならない。土地はわたしのものである。あなたがたは、わたしのもとに在住している寄留者だからである。24 あなたがたの所有するどの土地においても、土地を買い戻す権利を認めなければならない。25 もしあなたの兄弟が落ちぶれて、その所有地を売ったときは、買い戻しの権利のある近親者が来て、兄弟の売ったものを買い戻さなければならない。」

2C 近親者

ここで言っている「近親者」というのは、文字通り「近い親戚」です。その家族の最も近い親戚が、その土地を買い戻すことによって、部族の名によってその土地が続くことを意味しています。

このことを実践した、美しい話が聖書にあります。ルツ記です。エリメレクの家族が、飢饉のためモアブに移住しました。けれども、彼が死に、息子二人も死にました。息子二人は、それぞれ嫁をもらっていました。けれども、男が三人も死んだので、残されたやもめ、エリメレクの妻ナオミは、故郷ベツレヘムに戻ることにします。息子の妻の一人、ルツがなんとしても姑ナオミといっしょに行く決めていたので、それでベツレヘムに二人で戻りました。

そこで、落穂拾いをします。収穫の時に、落ちた穂を拾うことです。今でいうと、ごみ収集の資源ごみになるような、びんや缶を集めて収入を得るような感じですが。それをルツが行っていた時に、その畑の持ち主であるボアズの目に留まったのです。そしてボアズはなんと、ナオミの親戚だったのです。それで、ナオミは、ルツにボアズのところに行きなさい、そしてお嫁さんになりなさいと言いつけます。それで、ボアズのところに行きましたが、ボアズは、自分よりも近い親戚がいる。先ず彼らに聞かないといけません。それで彼が断わるならば、私がエリメレクの畑を買い取り、また、あなたを妻にすると約束したのです。

それで、長老たちを集めて、その買い取りの手続きをしました。近い親戚は、その買い取った畑だけでなく、モアブ人ルツがいることを知って、ボアズに畑を買いなさいと言います。それで、ボアズは買い戻し、かつルツと結婚しました。その曾孫が、ダビデになります。そして、ダビデの子孫に、イエスがいるというつながりです。

2B 悪魔に売り渡された世界

1C むせび泣くヨハネ

このように、土地購入証書があって、そしてその封印を解き、土地所有を実行してくれる人を探しているのが、今読んだ、5章の箇所です。天で起こっていることです。その土地とは、世界全体のことです。神ご自身が、全世界の支配者です。しかし、万物がすべて神に従っているわけではないのです。だから、贖う、つまり買い戻す人が必要なのです。それで、強い御使いが、だれが巻物を

開いて、封印を解く資格があるのか？と大声で叫んでいます。ところが、天においても、地においても、地の下まで探しても、だれもいません。それで、ヨハネが激しく泣いているのです。ここは、むせび泣くと訳することができる場所です。

ところで、主がなぜ、イスラエルの十二部族に与えられた土地に、これほどの強い意欲を持っておられるのか、不思議になったかもしれません。それは、イスラエルというのは、神ご自身の証しとして立てられているからです。神は、人を造られた時に、他の被造物を支配させるために造られたのです。「創 1:26 さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」

ところが、アダムが、神に罪を犯しました。食べてはいけない善悪の知識の木から実を取って食べました。妻エバが、悪魔に惑わされたのです。このことによって、人に与えられた万物の支配権が、悪魔に移譲したのです。明確に分かるのは、イエス様が誘惑を受けられた時です。「マタ 4:8-9 悪魔はまた、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての王国とその栄華を見せて、こう言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これをすべてあなたにあげよう。」この誘いに対して、イエス様は、「そんなことはない、あなたはこの世のすべての王国とその栄華は与えられてない。」と反論されませんでした。ただ、主のみを礼拝せよと書いていると言われて、抵抗されましたが、悪魔に世界が与えられていることについては、反論されなかったのです。なぜならば、事実、そうだったからです。主は弟子たちに、「この世を支配する者」と言われています(ヨハネ 14:30)。

2C 義に飢え渴く者

しかし、これから見ていきますが、イエスご自身が、贖いの対価となられて、いのちを献げられました。そして、よみがえられました。それで、御霊が注がれて、私たちは贖いの始まりを受け取っています。贖いの一部をすでに受け取っています。

このように、すでに受け取っているのですが、まだすべては来ていない、というのが今の時代です。主は、「義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるからです。(マタイ 5:6)」と言われました。飢え渴いているのです。後に来る御国、贖いの完成を切望しています。そして、その一部を御霊によって、すでに与えられています。けれども、すべてがそうなっているわけではありません。だから飢え渴くのです。まだ満たされていないのです。

黒人の公民権運動をしたキング牧師は、キリスト者は、理想主義者であり、現実主義者であるということを話しました。罪にまみれた今の世の現実を直視しています。しかし、理想を捨てていません。むしろ、理想のために前に進んでいます。実現することは、主が来られないかぎりありませんが、それを切に求めているのです。

そこで私たちは、罪の今を見つめ、嘆き、泣くのです。本来あるべき姿、あるいは、終わりの完成の日を知っているのに、そうではないものを見て、嘆き、悲しみます。数多くの預言者が泣きました。代表的なのはエレミヤです。哀しみ泣きながら書いた哀歌までがあります。そして、イエスご自身が泣かれました。主は、ある人々からはエレミヤだと思われていました。

主は、エルサレムを見て、泣かれました。「ルカ 19:41-45 エルサレムに近づいて、都をご覧になったイエスは、この都のために泣いて、言われた。「もし、平和に向かう道を、この日おまえも知っていたら——。しかし今、それはおまえの目から隠されている。やがて次のような時代がおまえに来る。敵はおまえに対して壘を築き、包囲し、四方から攻め寄せ、そしておまえと、中におまえの子どもたちを地にたたきつける。彼らはおまえの中で、一つの石も、ほかの石の上に積まれたまま残してはおかない。それは、神の訪れの時を、おまえが知らなかったからだ。」エルサレムという名前は、神の平和です。そこから遠く離れている姿を見て泣いておられるのです。しかし、主がエルサレムを回復してくださるのを知っています。

私たちも、終わりの日を見て喜びます。同時に、今がそうっていないのを見て、嘆くのです。

2A 贖いの代価

1B 立っている、屠られた子羊

こうしてヨハネが、むせび泣いていました。けれども、5 節を見てください、「すると、長老の一人が私に言った。「泣いてはいけません。ご覧なさい。ユダ族から出た獅子、ダビデの根が勝利したので、彼がその巻物を開き、七つの封印を解くことができます。」ユダ族から出た獅子、ダビデの根とは、もちろん、キリストのことです。この方が勝利したと言っています。この方が、封印を解くにふさわしい方、その資格を持っているということです。

1C 罪の代償

6 節を見れば、「屠られた姿で子羊が立っている」とあります。この方は、屠られた子羊のようになりました。イザヤ 53 章には、私たちの罪のゆえに、私たちの咎のゆえに、この方が、罪の代償のいけにえとして苦しみを受けられたことが預言されています。贖い、買い戻しというならば、この方のいのちそのものが、私たちの罪の赦しのための対価になってくださいました。「マル 10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代償として、自分のいのちを与えるために来たのです。」

2C よみがえり

そして、屠られてしまったはずなのに、それでも、今、ここで立っています。つまり、死んだのによみがえられたのです。死をもたらした罪を取り除かれたので、死そのものに打ち勝たれたのです。「I コリ 15:54b-55」死は勝利に呑み込まれた。」「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、お

まえのとげはどこにあるのか。」主こそが、世界を買い戻す土地証明書の署名をして、その封印を解くことができます。それは、ご自身がその対価となって、支払いをされたからです。今はただ、その引き渡しをするために、神の右の座に着いておられます。主ご自身が立って、地上に戻ってこられる時に、その引き渡しを、悪魔から、また、反キリストから強制執行するのです。

2B 畑の中の宝

1C 愛された妻

ところで、土地の買い戻しについて、ルツ記のことを思い出してください。買い戻しについての律法について、先にご紹介しました。けれども、ルツ記は土地の買い戻しだけの話にとどまりません。申命記には、次のおきてがあります。「25:5 兄弟が一緒に住んでいて、そのうちの一人が死に、彼に息子がいない場合、死んだ者の妻は家族以外のほかの男に嫁いではならない。その夫の兄弟がその女のところに入り、これを妻とし、夫の兄弟としての義務を果たさなければならない。」その家の名が絶たれてはいけないと主は考えておられて、それで死んだ夫の名を残すために、兄弟が、やもめとなったその女の夫となります。

そこでルツ記において、ルツは、エリメレクの息子の嫁でした。その息子の名を継ぐ人が必要です。つまり、ルツ自身の夫になる人が必要です。ですから、ここでの取り引きは複雑なのです。エリメレクの畑を買い戻すだけでなく、その中にいる、エリメレクの息子の妻を自分の妻とするという義務が生じるのです。

それで、ボアズが、自分よりもエリメレクの家に近い親戚に対して言いました。「4:5 あなたがナオミの手からその畑を買い受けるときには、死んだ人の名を相続地に存続させるために、死んだ人の妻であったモアブの女ルツも引き受けなければなりません。」初めに、買い戻すと言った親戚の人ですが、ルツとセットであることを知って、自分は買い戻すことができないと断りました。それで、ボアズは、エリメレクの畑を買い戻しました。ルツ記を読めば分かりますが、本望はルツとの結婚だったのです！彼女に心を留めて、それで彼女を守られますようにと祈って、愛したのです。それで、畑を買い戻しました。

2C 畑全体の購入

そこで、マタイによる福音書 13 章を、開ける方は開いてください。イエス様は、天の御国の奥義の喩えを語られています。「マタ 13:44 天の御国は畑に隠された宝のようなものです。その宝を見つけた人は、それをそのまま隠しておきます。そして喜びのあまり、行って、持っている物すべてを売り払い、その畑を買い戻します。」畑が世界です。そこに、ご自分の宝を見つけました。教会、私たちです。この教会を自分のものとしたために、ご自身のいのちを代価として支払い、その畑全体を買い取られたのです。世界を買い取られたのです。

私たちは、これだけ愛されているのです。私たちをご自身の妻とするために、なんと全世界を買い取ってしまわれたのです。

3A 万物の賛美

それで、5章の後半には、賛美が天において展開します。まずは、贖われた教会が出てきます。聖徒たちが、自分たちがキリストの血によって贖われたことを、主に賛美しています。それから、万物が主を賛美し、礼拝しています。「5:13 また私は、天と地と地の下と海にいるすべての造られたもの、それらの中にあるすべてのものがこう言うのを聞いた。「御座に着いておられる方と子羊に、賛美と誉れと栄光と力が世々限りなくあるように。」」

1B 御霊の初穂

私たち、キリストに結ばれた者たち、教会は、とてもユニークな立場に置かれています。ロマ8章には、「御霊の初穂」と呼ばれています。「8:23 それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだ贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。」律法では、収穫において、初穂を主に献げる祭りがあります。その初穂は、その後に来るすべての収穫の代表として、第一人者のようにして主に献げられます。初物とも呼ばれますが、私たちが献金をする時に、給料が与えられたら、まず初めに主に献げるものを分けておきなさいと勧めるのはそのためです。自分の収入全体が主のものであることを示すことができるからです。

それで私たちは、御霊が終わりの日に行われること、すなわち被造物をすべて、主のみこころの通りに回復されて、キリストの自由の中に招き入れるのです。主がお創りになられた意図のように、エデンの園のように回復されるのです。その前に、初穂として私たちを、御霊によって生まれさせてくださいました。「ロマ14:17 なぜなら、神の国は食べたり飲んだりすることではなく、聖霊による義と平和と喜びだからです。」

2B 希望と忍耐

ですから、私たちは終わりの日の至福の一部をすでに味わっています。けれども、まだその至福のすべてを味わっていません。そのごく一部のみです。だから、むしろうめくのです。これほど、すばらしい救いの喜びがあるのに、今の時代はそうならないという葛藤を覚えるのです。だから、先に読んだように、心の中で私たちはうめくのです。解答の見つからないような祈りを献げます。御霊の執り成しの助けによって、私たちは、言葉にならないような祈りも献げるようにされています。

そこで大事なものは希望です。そしてその希望を、目に見えないので、信仰によって抱くのです。「ロマ8:24-25 私たちは、この望みとともに救われたのです。目に見える望みは望みではありません。目で見ているものを、だれが望むでしょうか。私たちはまだ見えないものを望んでいるので

すから、忍耐して待ち望みます。」待ち望むけれども、そうっていない今を見て、うめき、時には嘆き、泣きます。それでも待ち望みます。そうして忍耐を働かせます。

これが、ヨハネがむせび泣いたところにある背景ですね。イエスが、私たちの罪のために死なれて、けれどもよみがえられました。だから、希望があります。しかし、この方が地上に戻ってこられて、初めて、ご自身が支払われた取り引きが完了するのです。強制的に悪魔を退け、天地を事実、ご自身のものとするのです。それまでの間、私たちは主に愛され、捕えられた者たちとして、この地上に置かれています。悲しいこと、嘆かわしいことがあるでしょう。主を愛して、熱烈に愛せば愛するほど、その葛藤は熾烈になります。御国の幻がはっきり見れば見えるほど、その中に生きようと思えば思うほど、苦しみが増し加わります。世を楽しんでいれば、そんな悲しみは味わわなくてよいのです。けれども、それでは決して自分のたましいは安らかないことを知っている人々は、切実に待ち望むのです。

どうか、こうした執り成し手、主がエルサレムを見て嘆かれたような、執り成し手になることができますように。